
最後の時間

御影永遠

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の時間

【Nコード】

N5789C

【作者名】

御影永遠

【あらすじ】

「地球はあと三日で消滅します」そうなった時、あなたなら何をしますか？愛する人と一緒にいたい。大切なあの人に伝えたい。希望を持ち続けたい。…残された時間は三日間。3つのエピソードが、同じ時間を交錯する作品です。

First episode (前書き)

本作品は3つのエピソードで構成予定です。

First episode「幸せの形」

Second episode「夢の形」

Third episode「希望の形」

First episode

その日は突然やってきた。

輸入食品を扱う中規模の商社に勤めていた田辺恭介は、得意先への見積書を片手に頭を抱えた。

「こんな金額じゃOKもらえる訳ないでしょ！」

「水産物は値上げ傾向にある事ぐらい、君もわかっているだろう」
ロシア産のタラバガニは需要の拡大で値が上がっていた。

「それでも予定より二十パーセントも高いじゃないですか」

恭介は上司に詰め寄った。

「私だってモスクワ支社には再交渉を促したよ。それでも向こうは強気なんだ。いらなければ買うな、とな」

上司は眉間にしわを寄せた。

それ以上は話しても無駄だった。

長年取引のある丸本水産を担当して二年。それなりの信頼関係もできて、社長の丸本氏とも食事に行く間柄にまでなった。

しかし、この見積もりを持っていけば、その関係にもひびが入る事は明白だった。

恭介はモスクワ支社に電話した。

返ってきた答えは上司のそれと同じものだった。

どうやって切り抜けるかを考えたが、恭介にできる事と言ったら丸本社長に見積書を提出して詫びる事以外になかった。

営業車に乗り込み、エンジンをかけた。

いつも同じ車を使っていて、カーステレオにはお気に入りの曲を載せてあった。

ボリウムをいつもより大きくすると、はぎれの良いトランペットが車内に響いた。

車中は何も考えなかった。

考えた所で、見積書の金額が変わる事はありませんから。

数パーセントの値上げであれば、日頃の信頼関係で何とかできる自信はあったが、この金額では打つ手がなかった。

丸本物産の駐車場に車を止め、重い営業鞆かばんを手にビルへ入った。

応接室には興奮気味の丸本がいた。

「田辺君、聞いたかね！」

恭介はたじろいだ。

（誰が漏らしたんだ！）

背筋を嫌な汗が流れた。

「それが…私の方ではどうにもなりませんもので…」

「そんな事はわかってるよ。しかし本当だとすると、私達はどんなってしまうのだろうか…」

恭介は返す言葉もなく、ただ立ち尽くした。

「とりあえず様子を見るしかないのだろうか、なぜこんな事になってしまったんだろうねえ」

丸本は煙草に火を点け、大きく煙を吐き出した。

「本当に申し訳ございません」

恭介の言葉を聞いて、丸本は笑った。

「どうして君が謝るんだ。君の仕業なのかね？」

「いえ、そういう訳ではありませんが、弊社の努力不足と言われても過言ではないと申しますか…」

「君は何を言っているのかね？」

丸本は怪訝けげんな表情を浮かべた。

恭介は鞆から見積書を出して丸本の目の前に差し出した。

「本当に申し訳ございません」

丸本は一瞥いちべつすると、意も返さない表情で言った。

「この際、仕事の話は後回しだろう。生きるか死ぬかの問題だよ」

「何の話でしょうか？」

恭介は丸本の言葉が全く理解できなかった。

「何だ、見ていないのか」

丸本はデスクの上にあるパソコンのディスプレイを恭介に見えるように動かした。

「地球滅亡だよ」

リアルタイムにニュースを掲載しているサイトには、

「隕石衝突の可能性、政府は会見せず」

と大きく書かれていた。

「なんですか、これは？」

丸本はため息をつき、真顔で答えた。

「地球に隕石が落ちてくるらしいんだ」

丸本はニュースの概要を話した。

数百の隕石群が地球に向かって来ている事。

大きいものでは直径で数十kmもある巨大なものも含まれている事。

そして、それらが地球に直撃する可能性がある事。

情報源は非公式となっているが、いくつかの天文観測所では隕石群を確認しているらしい。

NASAを要する米政府は沈黙を守り、日本政府も会見を開く予定はないとの話だった。

「本当なんですか？」

「さあね。でも作り話だとしたら、ここまで大きく取り上げられる事もあるまい？」

恭介は絶句した。

「この後、会議が入ってるから」

そう言って丸本は立ち上がった。

恭介が退席する際、

「田辺君、その金額は受け入れられんよ」
と言った。

香織は勤め先であるサントウ食品の事務所を出た。サントウ食品は加工食品を卸している会社で、恭介とは仕事を通じて知り合った。

付き合い始めて一年が過ぎていた。

帰りの駅のホームで、いつものように携帯からメールを送った。

「今日も終わったよー。まだ仕事中？」

電車が滑るようにホームへ入ってきた。

携帯をマナーモードにして、いつもと同じ前から三両目に乗る、つり革の空いている場所を探した。

車両の真ん中辺りに立っていると、サラリーマン風の二人組みが話している声が耳に入ってきた。

「どうするよ？」

「どうって言っても、ガセじゃねえの？」

「あのサイト、結構真面目なサイトらしいぜ。課長も毎日チェックしてるって言ってたからな」

「じゃあ本当にヤバイって事かよ？」

「そんなもん落ちてきたら、みんな死んじゃまうんじゃない？」

「映画だよな、そんなの」

香織は何気なく聞いていたが、何の話なのか少し気になっていた。次の駅で二人組みは降りてしまい、話の続きはわからなかった。

（何が落ちてくるんだろう？）

改札を抜けて、駅前のスーパーで夕食の食材を選びながら、さっきの話を考えていた。

買い物袋を片手に携帯を開くと、恭介からメールが入っていた。

「まだ仕事中。終わったらTELする」

最近はメールでの会話が多く、恭介が電話をしてみると言うてくる事は珍しかった。

夕飯を食べ終え、湯船に少し温目のお湯を張った。

入浴は香織の毎日の楽しみの一つだった。

ラベンダーのエッセンスを湯船に数滴落としてかき混ぜると、ほのかにラベンダーの香りが鼻腔をくすぐった。

防水のCDプレイヤーでお気に入りの音楽を流し、半身浴で四十分ほど浸かるのが日課だった。

お湯を手ですくって肩にかけた。

香織は自分の胸があまり好きではない。

もう少し大きければ自信も持てるのだが、自分の性格と同じく、その膨らみは控えめな感じだった。

（牛乳飲めれば良かったのかなあ）

胸を流れ落ちるお湯を見ながら、そんな事を思った。

その他にもコンプレックスがあった。

控えめな性格も起因しているのだろうが、自分の意見を主張できない事。

その日も同じ職場の先輩事務員に怒られていた。

原因はリサーチ結果の集計に誤りがあった事だった。

しかし計算ミスではなく、元データに誤りがあったのが原因で、香織は集計を頼まれただけだった。

（なんで私ばかり怒られなきゃならないのよ！）

そう思っても、その場では謝るのが精一杯だった。

風呂から上がると携帯をチェックした。

着信はなかった。

時計を見ると二十一時になろうとしていた。

（そろそろかな）

そう思っていると、着信音が鳴った。

「恭介？」

「ああ」

「TELして来るなんて珍しいね」

「そうかな？」

「そうだよ」

「そう。実はちょっと気になる話を聞いてさ」

恭介の話を聞いて二人組みを思い出した。

「本当なの？」

「さあね。俺も信じられないけど」

「本当だったら、もっと大騒ぎになってるんじゃないの？」

「かもね。だから隠してるのかもしれない？」
「そっか」

そのまま二人とも黙り込んだ。
沈黙を破ったのは恭介だった。

「でも、まだわかんないからさ」

「うん」

「じゃあ…お休み」

「お休み」

香織は携帯を充電器に戻し、ベッドに倒れこんだ。

（隕石が落ちてきたらどうなるの？）

漠然とした不安が体を包み込んだ。

動きがあつたのは二日後だった。

「政府の会見が本日十時より行われます」

恐らくほとんどの国民がテレビを見ていたに違いない。

フラッシュがたかれる中、神妙な面持ちで内閣総理大臣はマイクに向かった。

「国民の皆様、大変重要なお報告をせざるを得ない状況になりました」

政府側の一方的な会見は二十分ほどで終わった。

恭介は会社の大会議室で中継を見た。

普段は朝礼などで使われているホールは騒然となった。

皆、誰に向けてなのかわからない声を上げていた。

「どうなってるんだ！」

「隕石ってどういう事なのよ！」

「ふざけるな！」

「どうすれば良いの！」

恭介は声も出ずに呆然としていた。

誰もがその場を動けずにいた。

その時、誰かが叫んだ。

「でも政府は対策を講じていると言ってたから、きっと大丈夫だ！」
同意する者、悲観的になる者、泣き崩れる者、沢山の声が響き渡った。

しばらくして全員が自席に戻った。

恭介は携帯を手に取り、指が憶えているかのように短縮ボタンを押した。

しかし、考えている事は皆同じようで、回線がパンクしているのか掛からなかった。

メールを開き、香織のメールアドレスを呼び出した。

だが何を打てば良いのかわからなかった。

頭の中は真っ白で、本文のカーソルがリズム良く点滅しているのを眺めているだけだった。

香織は携帯のワンセグで会見を見ていた。

「どうして…こんな…」

心臓が大きな鼓動を繰り返していた。

香織の携帯を覗き込んでいた同僚が叫んだ。

「こんなの嘘に決まってる！」

誰もが半信半疑だった。

なぜこんな事になったのか、どうすれば良いのか、答えのない問題を解かされている気分だった。

香織はその場にしゃがみ込んでいた。

（どうしよう？どうすれば良いの？）

答えられる者は誰一人いない。

「でも、日本に落ちてくるとは限らないじゃない」
誰かがそう言った。

（そうだ！まだ終わりって決まった訳じゃない）

香織は座り込んでいる自分に気付き、立ち上がって隣を見た。

隣の席では後輩の紗江子がいつものように伝票を整理していた。

意にも返さないその態度に、香織は少し驚いた。

「紗江ちゃんは平気なの？」

紗江子は伝票をめくる手を止め、香織を見た。

「だって、成るように成るんじゃないですか？」

そのあつさりとした答えは、香織を勇気付けた。

「そうだね」

香織は椅子に座り、データ入力の手続きを始めた。

しばらくして携帯が鳴った。

メールを開くと恭介からだった。

「仕事終わった後に会えないか？」

香織は自分の上がる時刻を返信して仕事を続けた。

鍋のお湯が沸騰しているのを確かめて、パスタを入れた。

香織の家は最寄り駅から徒歩十分の場所にあつたから、恭介からの電話がパスタをゆで始める合図になっていた。

別の鍋にタコの刺身を入れて軽くボイルする。

ボイルしたタコを手早く冷水に浸すと、その身がキュッと引き締まった。

七分にセットしたタイマーが鳴り、パスタのゆで加減を確認した。

（もう少しかな）

フライパンにオリーブオイルと鷹の爪を入れ、タコをガーゼにくるんで水切りした。

鍋からパスタを取り出そうとサーバーを鍋に入れた時、玄関のチャイムが鳴った。

コンロの火を切り、慌てて玄関に向かった。

「いらつしゃい」

それだけ言つて、すぐにキッチンに戻った。

「パスタ作ってたんだ」

恭介は覗き込んで言った。

「失敗したかも」

皿に盛られたタコのペペロンチーノは、少し元気のない感じで横た

わっていた。

恭介は失敗とは思わずに食べたが、香織は自分のパスタに不満げだった。

「でも急にどうしたの？」

サラダをフォークで突付きながら、香織は尋ねた。

「ニュース、見ただろ？」

「ニュース？隕石の事？」

「ああ」

「見たよ。チョービックリだよ」

恭介は香織の簡単な感想に、驚きを超えて笑いがこぼれた。
「何？」

突然笑い出す恭介に、香織は意外な顔をした。

「チョービックリって、それだけかよ」

「他に何かある？」

「例えば…どうしよう、とか？」

「大丈夫だよ。頭良い人たちが何とかしてくれるよ」

「夕方のニュース、見てないのか？」

恭介は夕方に発表された最新情報を話した。

隕石を核で破壊して軌道を逸らすという作業が失敗したという話だった。

「うそ…」

「本当だよ。あと三日で地球に落ちてくるらしい」

香織は慌ててテレビをつけた。

「核で表面を破壊した所で、あのサイズの隕石には何の意味もありません」

「しかし、他に対策は考えられるのですか？」

「現段階ではお手上げという事です」

何かの専門家らしい人物が、当然という顔でコメントしていた。

「何コイツ。何かム力つく」

香織はコメンテーターに悪態をついた。

「このオッサンに文句言ってもしょうがないだろ」

「でもム力つくんだもん。偉そうな事言っならお前が何とかしろって思わない？」

恭介はさあね、と首を傾げた。

チャネルを変えても、臨時番組ばかりだった。

中には隕石が衝突した後の地球をシュミレーションしている番組もあった。

「要はみんな死ぬって事だろ？」

恭介が呟いた。

「みんな死ぬの？」

香織はその呟きに驚いた。

「多分ね」

恭介は素っ気なく答えた。

「でも、何とかするって言ってたじゃん」

「何ともならなかったんじゃない？」

「そんな…そんなの困る！」

「困るって言われてもなあ」

恭介はキッチンの換気扇のスイッチを入れ、煙草に火を点けた。

香織は食べ終わった皿を重ね、シンクに重ねて置いた。

「どうしよう？」

香織の問いに恭介は答えられなかった。

「何とかならないの？」

恭介に言ってもどうにもならない事はわかっていたが、不安な気持ちを抑えられなかった。

恭介は何も言わなかった。

仕方なく香織が皿を洗い出した時、恭介が口を開いた。

「明日さ、会社に有休届け出すから。香織も仕事休めよ」

「うん」

どうにもならないのなら、残された時間をどう過ごすかを考えるしかなかった。

「やっぱりお前もか」

ほとんどの人間が有休届けを出していた。中には無断で欠勤している者もいた。

「まあ当然だな。俺だって家族と一緒にいたいからな」

上司は弱々しい笑みをこぼした。

九時過ぎに、臨時休業となる事が決定した。

人員不足だけではなく、電話やFAXも回線がパンクしていて通じず、とても営業できる状態ではなかった。

香織の会社も同じだった。

出勤すると、専務から休業の知らせがあった。

電話は相変わらずの状態で、仕方なく恭介宛にメールを入れた。

「休みが取れました。そっちは？」

一時間ほど過ぎて、やっと返事が返ってきた。

「大丈夫。十一時に花時計で」

時計に目をやると、十時半になろうとしていた。

香織は慌てて部屋を出た。

駅のホームで電車を待っていた。

ホームにはいつものように駅員が立っていた。

（この人は休まないのかな？）

変わらずに電車を迎え入れる駅員を見て、香織は後ろめたさを感じた。

車内では隕石の話があちらこちらから聞こえてきた。

「破壊に失敗したって話だろ？」

「まだ核攻撃続けるらしいよ」

「どうせなら世界中のミサイルぶち込んだんじゃえば良くない？」

「隕石ってどこから飛んできたんだらう？」

「学校だけ吹き飛ばしてくれないかなあ」

「これで落ちてこなかったら笑えるよな」

電車を降りて待ち合わせの公園に向かって走った。

公園の入り口にある花壇には、大きな時計が設置されていた。

花壇の前に恭介が立っていた。

「ごめん。お待たせ」

荒れた息遣いを整えようと大きく息を吐いた。

「携帯使えないのがウゼーよな」

「ホント。直らないのかな？」

「しばらくはしょうがないかもな」

二人は駅に向かって歩き出した。

昼食を適当な店で探ろうと店を探したが、休業している店も目立つ。

「みんな休んでるね」

「しょうがないな」

開いていたそば屋に入った。

「天ぷらセット」

「すいません。今日はそばしかなくて」

「じゃあ、ざるで」

「私も」

連日の騒ぎで仕入れもままならないのだろう。

「ホント、どうなるのかな？」

香織は不安になった。

「とりあえず海老天は食べられそうもないな」

「帰りにスーパーで買い貯めしておいた方が良いでしょう？」

「海老を？」

「バカ」

そばで腹を満たして外に出ると、真夏の日差しが容赦なく照らしてきた。

「涼しい所に行こう」

「どこ？」

「映画でも見に行くか」

香織は辺りを見渡した。

カップル風の者や足早に歩いて行く者。

それほど普段と変わらない感じがした。

「香織？」

立ち止まったままの香織に恭介は声をかけた。

「こんな事してて良いのかな？」

香織は過ぎ行く人々を眺めながら、胸の奥でゆらつく不安を感じていた。

歩いている人々も、大きく背伸びしている街路樹も、荷下ろしの為に止められたトラックも、明後日には全てが消える。

もちろん自分達も。

「死にたくない」

香織が俯くと、溢れた涙の粒が一つ二つとアスファルトを叩いた。

「泣くなよ」

恭介は香織の肩にそつと腕を回した。

「何とかなるよ」

恭介は空を見上げた。

今は真夏の太陽と真つ白な雲しか見えない。

しかし、空の先には確実にそれはある。

こうしている間にも、確実に近付いてきている。

自分達の力ではどうする事もできない悪夢が、もう目の前まで来ているのだ。

恭介は自宅の郵便受けを開けた。

中は分譲マンションのチラシやピザ屋のデリバリーメニューなどの興味のないものばかりだった。

それらをエントランスに置かれたゴミ箱に投げ捨てると、エレベーターのボタンを押した。

階数を示す数字が一つずつ減っていくのを眺めていると、エントランスに知らない男性が入ってきた。

男性は恭介に軽く会釈をし、恭介も返した。

エレベーターが到着して乗り込むと、自分の部屋がある七階のボタ

ンを押した。

男性は六階のボタンを押した。
同じマンションの住人と言っても、ほとんどの住人を恭介は知らない。

増えていく数字を見上げていると、突然男性が声を掛けてきた。

「大変な事になりましたね」

エレベーターには恭介と男性しかない。

「そうですね」

恭介は男性を見ずに答えた。

「こんな事なら、もっと好きな事をやっておけば良かったと思いますよ」

男性は降り際にそう呟いた。

部屋に戻り、部屋の鍵と携帯をスチール棚に投げやった。

そのままソファーに座り、テーブルの上のリモコンに手を伸ばした。
相変わらず特別番組だった。

「タイムリミットは明日の午後三時です」

「それを過ぎると、軌道を変えても地球の引力に引き込まれてしまいます」

昨日とは違う人間が妙な模型を指差して言っていた。

煙草に火を点け、煙を一つ吐いた。

（ダメなのかもしれないな）

恭介はテレビを消して、ソファーに寄り掛かった。

終わりかもしれない、そう思っても、不思議と恐怖感はなかった。

煙草をもみ消すと、着ていた服を脱ぎ捨てて風呂場へ向かった。

勢い良く噴き出すシャワーのお湯を頭から被り、髪から流れ落ちるお湯の流れを見ていた。

男性の言葉を思い出していた。

（好きな事…か）

香織はスーパーでいつもより多めに食材を買い、自分の部屋に戻っ

た。

そば屋を出てから、恭介と街をブラブラと歩き、コーヒーショップでコーヒーを飲んだ。

二人の交わした言葉は少なかった。

不安に押しつぶされそうな心に堪えるので精一杯だった。

買ってきた食材を冷蔵庫に一つ一つ収めると、その量の多さに文句を言っているかのように、ウーンと冷蔵庫が唸った。

香織は冷蔵庫に手を掛けたまま、その場にしゃがみ込んでいた。

「これで…お終い」

涙が溢れてきた。

未来が見えない恐怖に体が震えた。

「お願い。助けて」

冷蔵庫にもたれ掛かり、消え入りそうな声で呟いた。

その時、リビングで携帯が鳴った。

「海老は買いだめした？」

「バカ」

「お前さあ、すぐにバカバカ言うの止めろよ」

「だってバカなんだからしょうがないじゃん」

「他に何かあるだろ？」

「例えば？」

「…おバカ様とか？」

「バカ」

恭介のふざけた声で、香織は少しだけ気が晴れた。

「明日さ、ちよつと用事ができちゃって。だから約束の時間、ずらしても良い？」

「用事って？」

「ちよつと。十二時に花時計で。良いだろ？」

「…うん」

「それとき、頼みがあるんだ」

「何？」

「弁当作ってきてよ」

「お弁当？」

「そう、ランチボックス！」

「バカ」

「だからさあ」

「はいはい。でも何で？」

「食べるからに決まってるだろ」

恭介の急な願いに戸惑ったが、幸いにも冷蔵庫にはこれでもかというほど材料が入っている。

「わかった」

「おにぎりに梅干入れるなよ」

「全部入れてやる」

「梅干入れたらブログに「香織のバカ」って書いてやるからな」

「バカ」

「じゃあ、明日な」

「うん。お休み」

不安が消えた訳ではなかったが、棚からプラスチック容器を取り出す香織の顔には笑みがあつた。

「悪い」

「もう、三十分も遅刻じゃない」

籐で編みこまれた手さげバックを恭介に押し付け、香織は怒った素振りを見せた。

「ごめんって」

「謝り方に誠意がない」

恭介は香織の前に立ち、深々と頭を下げた。

「この度は大変申し訳ございませんでした」

香織は少し考える振りをして、恭介の頭を軽く叩いた。

「よし。許す」

「じゃあ行こうか」

顔を上げて香織が笑っているのを確認すると、恭介は駅に向かって歩きだした。

「どこに行くの？」

「動物園」

「えっ？」

「Zoo」

「…」

「ドウブツエーン」

「バカ」

おどけて見せる恭介に、香織もつられて笑う。

「動物園も休みじゃない？」

「大丈夫。電話したらやってるって」

「電話したの？」

「香織様の為ですから」

いつも以上にふざける恭介に変な気分だったが、こんな時だからこそ逆に楽しかった。

動物園は人気が少なかったが、いつもと変わらずに営業している様子だった。

「よし、昼飯タイムだ」

「早っ！着いたばかりだよ？」

「腹減ったんだからしょうがないじゃん」

売店で飲み物を買って、フリースペースにある木製の椅子に座った。

「うおっ、気合入ってんじゃないん」

広げられた香織の弁当に、恭介は大げさに喜んで見せた。

丁寧に海苔で巻かれたおにぎりを一口ほおばると、醤油とかつおぶしの風味が口一杯に広がった。

「やっぱおにぎりはおかだな」

無邪気にかぶりつく恭介を見て、香織は呆れ半分嬉しさ半分といった所だった。

「少し多く作っちゃったかも」

香織はそう言ったが、恭介がほとんど食べてしまい、結局容器は空になった。

「動物見に行こうよ」

「えゝ、行くの？」

「何しに来たのよ」

「動物見に？」

「だったら行くよ！」

香織は恭介の腕を引っ張り、恭介はやれやれといった感じで立ち上がった。

動物園ではしゃぐなんて香織自身思ってもいなかったが、不安な気持ちに比例するように楽しさが込み上げてきた。

「ほら、恭介の仲間だよ」

「何でカバなんだよ」

「コビトカバだって。なんでコビトなのかな？」

「おじいさんが寝てる隙に小人が作ったから」

「絶対に嘘」

「中に小人が入って操縦してるから」

「バカ」

「カバだろ？」

「三大珍獣の一つって書いてあるよ。他は？」

「俺と香織」

「バカ」

「龍とペガサス」

「いないじゃん」

「ヤンバルクイナとイリオモテヤマネコ」

「本当？」

「嘘」

恭介はおどけて笑い、香織は呆れて笑った。
自然と手を繋いでいた。

真夏の日差しが体を火照らせていたが、お互いの心が体の芯まで温

かくしていた。

まるで元々一つの生き物だったかのように、恭介は香織を感じ、香織は恭介に寄り添った。

今まででもお互いを思い合っていたはずなのに、こんなにも相手を近くに感じられたのは初めてかもしれない。

幸せの形。

それはハートの形。

手を繋いだ恋人同士が作り出すMの形は、ハートの形の一步手前。二人の形もハートに変わる日が来る。

しかし、晴れ渡った高い空が絶望の色に染まる時は、刻一刻と迫っていた。

「三時、過ぎちゃったね」

「おやつ食べたかった？」

わかっただけのおどける恭介に、香織は何も言わなかった。

「夕飯は予約してあるからさ、そろそろ行くか」

「うん」

人気のない動物園は寂しすぎて、とど留まるには辛い場所に変わっていた。

電車も人気はまばらだった。

同じ車両に乗っている数人も、ただ黙って座っていた。

俯いていた香織が呟いた。

「どうなったのかな？」

「さあな。でもそんな事考えてもしようがないじゃん」

恭介の顔を見上げると、反対側の窓から外を眺めていた。

「怖くないの？」

恭介は流れていく景色から視線を外そうとはせずに黙っていた。

香織は再び俯き、膝の上に置かれた自分の握りこぶしを見つめた。

「怖いけど、しょうがないじゃん」

恭介は相変わらず景色を眺めていた。

「恭介は何でもしょうがないって思えて良いね」

皮肉にもとれる言葉が自分の口からこぼれた事に、香織は嫌悪感を抱いた。

さすがに恭介も怒っただろう。

そう思ったが、恭介は意外な言葉を口にした。

「カバだからな」

そう言つて香織に向き合い、大きく口を開けた。

自分への苛立ちから、香織は何も言わずに俯いた。

「ここ、どこ？」

電車を二回乗り継ぎ、初めて降りる駅のホームで恭介に尋ねた。

「夕飯、予約してあるつて言つただろ？」

それだけ答えて恭介は先に歩き始めた。

無言で付いて行くと、一軒の家の前で立ち止まった。

「俺の実家」

恭介の言葉に驚き、香織は二度三度と瞬きを繰り返した。

「恭介の実家？」

「そう」

恭介は香織の様子を気にも留めない顔をしてチャイムを押した。

「はい」

恭介の母であろう声がドアフォンの向こうから聞こえた時、香織はみぞおち辺りが締めつけられる感覚がした。

居間には恭介の父の姿があった。

「おう、元気だったか」

恭介に声を掛けつつ、明らかに香織が気になる様子だった。

「一応ね。この子が三上香織さん」

簡単な紹介を受け、香織は勢い良くお辞儀した。

「初めまして。恭介の父です。まあ何だから座つて」

勧められるまま座布団に正座した。

「そんなに緊張しないで」

「親父だつて緊張してるだろ」

「そりゃあこんなに綺麗なお嬢さんが来たら緊張するさ」

「親子揃ってバカだろ？」

恭介の言葉に思わず頷き、慌てて首を横に振った。

「わざわざこんな所に来てくれてありがとね」

恭介の母がキッチンからやってきた。

「いえ、お邪魔します」

香織は声が震えるのを隠すように早口で答えた。

「大した物はないけど、ゆっくりしていつてね」

恭介の母はビールと枝豆をテーブルに置くと、キッチンに戻っていった。

「あ、あの、手伝います」

立ち上がるうとする香織を恭介が制した。

「良いよ。香織は客なんだから」

そう言ってコップにビールを注いだ。

「何だ。せつかくなら香織さんにお酌してもらいたいのに」

「あつ、すみません」

恭介の父の言葉に香織は慌てたが、恭介は気にせずビールを注いだ。その後も緊張の連続で、香織は食べた料理の味すらわからなかった。

「またいらしてね」

帰り際、玄関で見送られ、香織は深々とお辞儀した。

「驚いた？」

「もう、信じられない！」

帰りの道すがら、香織は恭介に非難を浴びせた。

「本当に緊張したんだからね！」

恭介はただ笑って聞いていた。

手を繋ごうとする恭介を振り払い、香織は緊張でしゃべれなかった時間を取り返すような勢いでしゃべり続けた。

香織の降りる駅が近付いて来た時、恭介は明日の約束を持ちかけた。

「泊まっていかないの？」

「ちよっとやる事が残ってて」

翌朝八時に約束して別れた。
走り出す電車を見送りながら、香織は少し寂しさを感じていた。
最後の夜かもしれないのに、恭介は自分と一緒にいるよりも大切な
事があるのだという思いが頭をよぎった。

八時五分前に花時計にやってくると、恭介は先に着ていた。

「珍しいね」

「そうかな？」

「そうだよ」

「たまには…な」

そう言って歩き始めた。

「今日はどこに行くの？」

「公園」

「何それ？」

「良いから」

電車に乗って連れてこられた場所は、どこにでもありそうな小さな
公園だった。

「何ここ？」

「ただの公園」

「ここで何するの？」

香織の質問に恭介は答えず、ブランコに乗ってはしゃいでいた。

香織は呆れてベンチに座り、恭介の姿を眺めていた。

「香織も乗れよ」

大きな声で恭介が叫んだ。

香織は無視したが、何度も大声で叫ぶので、恥ずかしくなって恭介
の元へ行った。

「もう、止めてよ。子供が見てるでしょ」

「俺が押してやるよ」

香織は仕方なくブランコに座った。

恭介は香織の背中をゆっくり押すと、ブランコは錆びた金属音を出

しながらゆつくりと揺れた。

「懐かしいな」

乗る前は嫌だったのに、いざ乗ってみるとまんざらでもなかった。ゆつくりと揺れるブランコは重力に従い、やがてその動きを止めた。香織が立ち上がるうとした時、恭介が香織の肩に手を置いた。

「えっ？」

反対側の砂場ではしゃぐ子供の声で、恭介の言葉が聞き取れなかった。

「結婚してくれ」

恭介は同じ言葉を呟いた。

香織は振り向こうとしたが、恭介は香織に寄り添うように立っていたので、恭介の顔を見る事ができなかった。

「俺と結婚して欲しい」

呟くような声は、ふざけている恭介の声ではなく、温もりを感じる優しい声だった。

香織は言葉が出てこなかった。

地球の最後の日となるかもしれないこの時に、突然のプロポーズで頭の中はグチャグチャだった。

恭介はその後は何も言わず、香織の言葉を待っていた。

「隕石、落ちてくるかもしれないよ？」

「ああ」

「死んじゃうかもしれないよ？」

「そうだな」

香織は言うべき言葉を搜した。

しかし、頭に浮かぶのは明日の来ない運命の事ばかりだった。

「未来なんて、あるかどうかわからないじゃない」

恭介は大きく息を吸い込み、そして吐いた。

「未来はどうでも良い。…香織と結婚したい。それだけ」

肩に置かれた恭介の手に、香織はそつと手を重ねた。

「あつ、チューしてる！」

砂場で遊んでいた子供の声が響いた。

「本当はさ、さっき「今が欲しい」って言おうとしたんだけど、クサイ？」

「クサ過ぎてドン引き」

二人はもう一度笑顔を重ねて、お互いの存在を確かめ合った。

恭介はジーンズのポケットから用意した指輪を取り出すと、香織の薬指にそっとはめた。

「いつもの恭介なら右手にしてくれると思ったのに」

「ブランコの所からやり直す？」

「そうね」

「バカ。冗談だよ」

ブランコに座りなおした香織は、恥ずかしそうに横を向く恭介を見て笑った。

「でも、なんでこの公園なの？」

恭介は公園の反対側を指差した。

その先には、真っ白な十字架が見えた。

「あの教会の神父、良い人なんだよ。電話したら「いつでも来なさい」って」

恭介は香織の手を握った。

「その前に、香織のご両親に挨拶しなきゃ」

香織は恭介を引っ張るように教会へ向かって走り出した。

「そんなの、明日でも良いじゃない」

繋がれた手の指輪は、太陽の日差しを浴びて、いつまでもキラキラと輝いていた。

Second episode (前書き)

物語としては短編ですが、3編の物語を同じ設定で書いていますので、背景を省略しています。その為、先にFirst episodeをご覧くださいからお読み下さい

Second episode

「よう、今日も早起きだな」

幸太郎は相棒の彦星に声を掛けた。

彦星は幸太郎の声を聞き、プールから上がると激しく身震いをした。幸太郎は持っていたバケツからアジを1匹掴むと、プールに向かって投げ入れた。

待ってましたとばかりにプールに飛び込んだ彦星は、沈んでいくアジをパクリと口に入れた。

「美味いか、彦星」

幸太郎が彦星の担当になってから三年が過ぎた。

十五歳になるホッキョクグマは、七夕にやって来た事から彦星と名付けられ、それが自分の名前だと何となくわかっているらしい。

彦星はプールから顔をひょっこりと出し、次に投げ入れられるであろう餌を待っていた。

朝の食事を済ませてプールから上がり、お気に入りの場所でゴロンと横になる彦星を見て、幸太郎は事務所に戻った。

「彦星の様子はどうだい？」

園長の三沢が声を掛けた。

「今日もご機嫌ですよ」

「京子が死んでから三年かあ。彦星も寂しいだろうなあ」

幸太郎は三年前にツキノワグマの担当からホッキョクグマの担当に変えられた。

ホッキョクグマの京子が死んだ年、二十年以上担当していた前任者が退職した為だった。

ホッキョクグマは園内でも人気の動物なので、彦星の健康状態を気に掛ける者も多かった。

「我が物顔で泳いでますよ」

プールを悠々と泳ぐ彦星を想像しながら、園長は嬉しそうに頷いた。

大体の飼育員は二、三種の動物を担当していたが、幸太郎は彦星の担当だけだった。

代わりに園内の雑用や案内係などをこなさなければならなかった。飼育日誌に朝の状態を書き込み、開園の準備を手伝う為に事務所を出ようとした時、先輩の溝口に声を掛けられた。

溝口は幸太郎の四つ先輩で、幸太郎が担当していたツキノワグマを初め、三種類の熊達を担当していた。

「幸太郎、テレビ見たか？」

「テレビですか？昨日は当直明けで爆睡してましたよ」

「何か、重要な放送が今日の十時からあるらしいぜ」

「十時って開園時間じゃないですか。そんなの見てる暇なんてないですよ」

幸太郎は肩をすくめて見せると、彦星の元へ向かった。

客の観覧スペースを竹ぼうきで丁寧に掃き、彦星のプロフィール板を雑巾で拭いた。

時計に目をやると九時半を回っていた。

慌てて掃除用具を元に戻し、ペンギンエリアへ走った。

ペンギンエリアは道を挟んだ隣にあった。

既に奥の檻の扉が開き、ペンギン達が展示スペースで思い思いに過ごしていた。

「ちよつと、遅いんじゃない？」

ペンギン担当の瑞希は幸太郎の二つ先輩で、キングペンギン、ケーブペンギン合わせて三十五頭を担当している。

ホッキョクグマエリアの掃除が終わると、ペンギンエリアの掃除を手伝うのが日課となっていた。

「すみません」

幸太郎は用具ロッカーから竹ぼうきを取り出し、観覧スペースを掃きだした。

「こっちは良いから、あっち」

瑞希に怒られる幸太郎の姿を、ペンギン達は興味深そうに眺めていた。

「あんまり見るなよ」

ペンギン達の好奇の視線に、幸太郎は気まずい思いだった。

「もうすぐ開園ね」

一通り掃除が終わり、瑞希は掃除の終了を合図した。

「僕は彦星の所に戻りますね」

幸太郎は竹ぼうきを元の場所に戻すと、逃げるようにその場を去った。

彦星は相変わらずお気に入りの場所の寝転んでいたが、幸太郎の姿を目で追っていた。

「お前は気楽で良いよな」

幸太郎の言葉に、彦星はあくびで返した。

彦星にもバカにされて、幸太郎はため息をついた。

「おはようございます」

館内のスピーカーから開園放送が流れた。

入場ゲートから順番に見えていって、ホッキョクグマにたどり着くのは子供の足で二十分といった所だ。

幸太郎は朝一番に来る客達を、彦星と迎えるのが日課だった。

「今日は愛想良くしてくれよ」

お腹を満たして満足した彦星は、そんな幸太郎の願いと裏腹に、寝返りを打って壁の方を向いてしまった。

「全く、お前は…」

幸太郎は動物が好きという理由もあったが、動物を見て喜ぶ子供を見るのが好きでもあり、飼育員の道を選んだ。

彦星は子供の人気者で、機嫌良くプールで泳いでいる時は、子供達の歓声が辺りに響き渡る。

彦星もお調子者なので、子供の黄色い歓声に気を良くして、陸に上がってもゴロゴロと転がって見せたり、プールに勢い良く飛び込ん

で見せたりして、更に歓声を集めようと愛らしい姿を見せてくれる。幸太郎が（こいつ、本当はわかってるんじゃないか？）と思う時があるほど愛嬌がある。

しかし、機嫌が悪いと寝たまま全く動かない時もある。

客に手を振れとまでは言わないが、全く動かない姿を子供達が眺めているのを見てしまうと心が痛い。

「もうすぐお前のファンが来るぞ。お客様あつての動物園なんだからな」

ピクツと耳を動かしただけで、彦星はそっぽを向いたままだった。時計に目をやると十時半を過ぎていた。

いつもなら一番の客が来てもおかしくない時間だ。

しかしその日は客の姿どころか、声一つ聞こえない。

「お前がそんな態度だから、お客も来なくなつたじゃないか」

幸太郎は捨てゼリフを残してゲートに足を向けた。

ゲートにたどり着くまで、お客の姿は一人も見なかった。

「お客、来てないんですか？」

ゲートの係員に声を掛けた。

「ええ。今日は一人も」

幸太郎は首を傾げた。

幸太郎の知る限り、例えば平日といってもこんな事は初めてだった。

事務所に戻ると、職員達が皆深刻な顔をしていた。

「どうしたんですか？」

側にいた溝口に声を掛けた。

「大変だぞ」

溝口は血の気の引いた顔でそう呟いた。

事の次第を聞き、幸太郎は呆然と立ち尽くした。

その日の来場者数は、たったの三十六人。動物園始まって以来の事だった。

夕方早々にゲートを閉め、職員全員が集められた。

「皆知っていると思いますが、大変な事態となっています」

沈痛な面持ちで園長が話し始めた。

「私自身、かなり動揺しています。恐らく人類全てがそうだと思います」

園長の言葉を力なく聞いていた。

そして、園長は核心に触れた。

「明日以降、来場者数は極僅かになる事が予想されます。その為、明日から三日間は閉園とします」

周囲がざわついた。

「役所にも伝えてあります。ただ、動物達は私達の手を必要です。だから、大変心苦しいのですが…」

園長の苦痛に歪んだ顔を見て、周囲は息を呑んだ。

「出勤のシフトを決めて、動物達の世話を続けたい」
再び周囲がざわめきたった。

「動物の世話なんて、私達じゃ無理です！」

「そうだ。閉園するなら俺達はいらないじゃないか！」

「じゃあ飼育員だけ出勤すれば良いって事か！」

「そういう訳じゃないけど、俺はただの清掃員だから…」

「自分だけ良ければそれで良いのか！」

喧々諤々の様相に、園長は苦悶の表情を浮かべた。

「わかりました。確かに私には強要できません」

園長は声を張り上げて叫び、周囲はやつと落ち着いた。

「明日以降、皆さんには出勤を強制しません。世話を買って出てくれる方のみ、出勤をお願いします」

そう言つて深々と頭を下げた。

散会となり、皆は散り散りに別れていった。

幸太郎は園長の姿を横目で見た。

机に倒れこむようにして、頭を抱えていた。

「幸太郎。飲みに行こうぜ」

溝口が声を掛けた。

「今日は…」

「良いから行くぞ。瑞希ちゃんも誘ってあるから」

動物園の近所にある居酒屋は、幸太郎が住む寮からも近い。

瑞希も近所にある女性寮のアパートに住んでいる。

溝口は自転車で二十分ほどのアパートに住んでいたので、三人でよく飲みに行っていた。

「とりあえずビールね」

溝口は慣れた口ぶりで店員に言った。

「いやあ、まいったなー」

冷たいおしぼりで顔を拭きながら、溝口が言った。

「溝口さん、それオヤジっぽいから止めた方が良いですよ」

「おれは立派なオヤジだよ。娘の写真見るか？」

そう言ってポケットから免許証入れを取り出して、愛娘の写真を瑞希に見せた。

「もう見飽きましたよ」

瑞希は溝口の手を押し返し、呆れ顔で携帯をチェックした。

「男から電話か？」

からかう溝口に、面倒臭そうに答えた。

「そんなんじゃないや」

「だったら目の前に手頃な奴がいるじゃないか」

溝口は幸太郎に視線をやった。

「えっ、僕ですか？」

「お断りします。私は白熊の次の存在なんて嫌ですから」

「はっはっはっ。幸太郎の恋人は彦星だもんね」

店員の持ってきたビアジョッキを片手で握ると、テーブルの中央に差し出した。

「お疲れ様でした」

簡単な乾杯を済ませ、思い思いに料理を注文した。

「でも、どうなるんでしょうか？」

オムレツを小皿に取り分けながら、瑞希が心配そうに言った。

「宇宙は専門外だからな」

溝口は頼んだ追加のビールに手を伸ばしながら答えた。

「宇宙に熊がいるなら、幸太郎が詳しいはずなんだけどな」

「いたとしても、僕は熊の事しかわかりませんよ」

幸太郎はビアジョッキから滴る水滴を何度もおしぼりで拭いていた。

「そうじゃなくて、動物園の方ですよ」

三人は黙り込んでしまった。

有志を募る。

言い方は良く聞こえるが、園長の本意ではないにせよ、試されている事に変わりはない。

「俺は…できれば家族と一緒にいたい」

溝口は家族と動物の間で揺れ動く思いを断ち切るかのように、力強い口調で言った。

「私も、彼といたい」

瑞希はテーブルに落ちた水滴をなぞりながら、小さく呟いた。

そんな二人の様子を見て、幸太郎は明るく振舞った。

「僕は家族も彼女もないから、ゴン太もペンギン達も、僕がちゃんと面倒見ますよ」

「お前だって親御さんの所に帰りたいたらう？」

「いえ。うちの両親は大丈夫です。僕が帰省すると、いつも邪魔者扱いされてますから」

溝口はビアジョッキに口を付けて一気に傾け、喉を鳴らしながらビールを飲み干した。

「すまん」

隣客の声がかき消されてしまいそうなほど、小さな声で言った。

瑞希は俯いていたが、ゆっくりと顔を上げて幸太郎を見た。

「やっぱり…私も…」

幸太郎は言葉の続きを察して、明るい声で瑞希の言葉を打ち消した。

「もう、大丈夫ですって。僕だってもう五年目なんですから。先輩達がいなくても、ちゃんと面倒見れますよ」

幸太郎は塩焼きそばを小皿に盛り、それを頬張って言った。

「それに、モグモグ、ゴン太は、ゴクン、元々僕の担当だったんですから。ペンギンだって瑞希さんが休みの日は僕が面倒見てるんですからね」

「お前、食いながら喋るなよ」

「ホント。汚いんだから」

二人の顔に笑顔が戻り、幸太郎は少しほっとした。

店を出て、各々の帰り道へと別れた。

幸太郎は夜道を歩きながら、彦星の事を考えた。

（お前と一緒にいるからな）

大きな体を丸くして寝ているであろう彦星の姿が目に見えた。

幸太郎はいつもよりも一時間前に着いた。

事務所に入ると、すでに明かりが点いていた。

「おお、早いな」

園長は飼育員と同じ作業服を着て、自席でお茶をすすっていた。

「どうしたんですか、その格好？」

年季の入った作業服を見て、幸太郎は少し驚いた。

「どうだ。まだ似合うだろう？ 私だって十年前までは現役だったんだからな」

「確か、ミミの世話をされていたんですよね？」

ミミとは二十年近く前から子供達に愛されているインドゾウの事だ。

「今でもミミは、ちゃんと私を覚えていてくれるんだぞ」

「でも、ラパティから無視されたんですよね？」

「何だ、知ってるのか」

園長は大声で笑った。

「あいつが来た時は、もうこの席に座らされていたからな」
園長は自分の机をそっと撫でた。

「でも今日からは現役復帰だ」

「無理してぎっくり腰にならないで下さいよ」

幸太郎は笑いながらコーヒーマーカーにカップを置いた。

コーヒーを飲むと、足早に調理場へと向かった。

各動物達の餌は大きな冷蔵庫室に区分けして置いてあり、どの動物にどれだけの量を与えるかは決められていた。

幸太郎は彦星の朝食を準備して、他の動物達の朝食メニューにざつと目を通した。

「私も手伝うよ」

園長が腕まくりをしてやってきた。

「じゃあ、園長はミミ達をお願いします」

メニューを手渡すと、園長は足早に象舎へ向かっていった。

（二人だけだったら、朝食が終わる頃には昼食の準備だな）

自分の他にも飼育員が来てくれる事を祈りながら、アジの入ったバケツを片手に彦星の元へ急いだ。

彦星は展示スペースにはいなかった。

夜の間は展示スペースから小さな通路で結ばれている部屋で寝ていたのだろう。

鉄の扉を開いて窓越しに小部屋を覗くと、彦星が丸まって寝ている姿が見えた。

「おい、彦星。今日は忙しいから、ちょっと早いけど朝飯食べてくれ」

幸太郎の声に反応し、彦星は頭を上げた。

展示スペースに回って彦星を呼ぶと、のそのそと巨体を揺らしながら彦星がやってきた。

「悪いな。他の動物も朝飯を待つてるんだ」

彦星は辺りを二、三度見回し、大きく身震いをした。

幸太郎がアジをブラブラと揺らして見せると、ゆっくりとプールに近付いてきた。

飛んでくるアジを見て、転げ落ちるようにプールへ飛び込んだ彦星は、ゆつくりとした泳ぎでアジを口にした。

続けざまにアジを投げ入れて行き、バケツが空になると全速力で調理場に戻った。

彦星はしばらく泳いだ後、陸地に上がってお気に入りの場所ですと寝転がった。

幸太郎が調理場に戻ると、そこには数人の飼育員が各々の餌を準備していた。

「みんな、来てくれたんですか！」

「別にお前の為に来た訳じゃないさ」

「お前にフラミンゴの世話なんて無理だからな」

「ぼやっとするな。みんなが待つてるぞ」

忙しなく準備を進める職員達は、皆充実した笑みを浮かべていた。

「僕、ゴン太の餌を準備しますね」

幸太郎が冷蔵庫に生肉を取りに行こうとした時、冷蔵庫の扉が開き、奥から肉のブロックを抱えた溝口が出てきた。

「お前にゴン太は任せられないさ」

「ペンギンも、ね」

小アジが山のように入ったバケツをさげて、瑞希も奥から出てきた。

「溝口さん…、瑞希さん…」

「邪魔だ、どいたどいた」

溝口は幸太郎の脇をすり抜けて、肉のブロックを調理台に乗せた。

「まあ、そういう事」

瑞希は軽くウインクすると、ペンギン達の元へ向かっていった。

全ての動物達の朝食が終わり、事務所に集まってみるとかなりの数の飼育員が来ていた。

「皆さん、本当にありがとう」

園長は深々と頭を下げた。

「止めて下さいよ。園長の為に来た訳じゃありませんよ」

「わかつてる。わかつてるよ」

園長はそれでも目頭を抑えたまま、顔を上げようとはしなかった。

「結局半分は集まった訳だな」

「家族よりツキノワグマ選ぶなんてサイテーよね。そんな人と絶対結婚したくない」

瑞希は溝口を横目で見ながら、クスツと笑った。

その光景を見て、一同が笑った。

誰しもが家族なり恋人なり友人なり、大切な人がいるはずだった。

しかし、集まった顔には後悔がない、スッキリとした表情が浮かんでいた。

「溝口さん…本当に良いんですか？」

幸太郎は隣の席で日誌を書いている溝口に声を掛けた。

「良いも悪いも、ゴン太達は俺達がいなきゃ生きて行けないんだぜ」
溝口は持っていたボールペンをクルツと回すと、ニヤリと自虐的に笑って言った。

「でも、出てくる時にかみさんに「人でなしっ！」って言われたけどな」

愛する者を残してまで仕事を選ぶ事が、はたして正しいのかは誰にもわからない。

ここにいる人々は、皆同じ気持ちで集まったのだ。

「ゴン太だつて、俺の家族さ」

その日、幸太郎は日誌の先頭にこう記した。

「朝食の時間を一時間早めた為、多少寝ぼけていた。それでもアジ三十四匹を一匹も食べこぼす事なく食べる。彦星は食べる事に関しては優秀な僕の弟だ」

日誌を閉じて時計に目をやると、十時五分前だった。

いつもなら観覧スペースを掃き、彦星と客を待っている時間だ。

彦星の元へ向かおうと席を立った時、一人の事務員が言った。

「園長、これだけスタッフが集まったんですから、開園する事はないでしょうか？」

園長は動物園のパンフレットを眺めていたが、事務員の声に顔を上げた。

職員を見渡すと、誰もが頷いた。

園長は少し考えると、力強く叫んだ。

「よし、やろう！」

職員は歓声を上げた。

幸太郎達は園内の掃除の為に走って事務所を出て行った。

園長は紙を取り出すと、力を込めて筆を握った。

そして入場ゲートへと足早に向かい、張られていた「本日は臨時休園させて頂きます」と書かれた紙を引き剥がし、新しい紙を貼り付けた。

「本日、入場料無料」

園長は腕組みをしながら、その文字を見て何度も頷いた。

「私はね、沢山の人達に、ここの動物達を見てもらいたいんだ。そして、動物達の命を感じて欲しいんだ」

目を潤ませる園長の姿に、事務員は優しく微笑んだ。

「園長、ここは私がお引き受けします。園長は園内をお願いします。事務所では、他の事務員が慌しく動いていた。」

「ええ。本日も開園致します。…はい、職員は揃っています。…はい、園長もご了承されています」

「あの、そちらのラジオ番組でお知らせして頂く事はできませんでしょうか？」

電話以外にも、インターネットの掲示板などにどんどん書き込んでいた。

夕方になり、事務所に職員が集まった。

その日の来場者数は八人。

「いやあ、このままじゃ赤字で閉園だなあ」

園長は大声で笑った。

「でも、私達の貸切みたいで楽しかったですよ」

「私も！こんなに動物達を見て回れたのは初めてです！」

「俺も、担当以外の動物をじっくり見た事なんてなかったからなあ」
その日に集まった事が無駄だったと思うものは一人もいなかった。

「今日来てくれた方々は、きっとまたいつか来て下さると思います」
園長は嬉しそうに言った。

「来られたお客様が、帰り際に「ありがとう」とおっしゃってくれました！」

ゲートにいた事務員は、その時の興奮冷めやらぬ様子だった。

「例え八人でも、ここの動物達はみんな幸せだよね」

瑞希の言葉に、幸太郎は頷いた。

数名の当直を残し、職員達は帰路に着いた。

誰も明日の事は口にしなかった。

言葉にしなくても、また皆が集まってくる。

例え集まらなくても、自分は明日も来よう。

一人一人がそう思っていた。

明くる日も、前日と同じ職員が顔を合わせた。

開園の知らせを耳にしてやってきた職員もいて、前日よりも人数が増えていた。

いつものように準備をして、いつも通り開園した。

昼食も終わり、幸太郎は彦星が泳ぐ姿を眺めていた。

真夏の日差しが展示スペースにも容赦なく降り注ぎ、彦星は日陰とプールの往復を繰り返していた。

幸太郎が小部屋の掃除をして観覧スペースに戻ってくると、一組のカップルが彦星を見ていた。

「この白熊、彦星っていうんだって」

「へえ」

「あっ、ゴロゴロしてる。可愛いね」

「俺がゴロゴロしたら邪魔で、白熊なら可愛いのかよ」
「当然」

彦星の仕草を見て笑っているカップルを見て、幸太郎は嬉しくなつた。

その時、男性と目が合った。

男性は幸太郎に声を掛けてきた。

「あの、この白熊、何で彦星って名前なんですか？」

幸太郎は声が届きやすいように、少し近付いて答えた。

「こいつがやってきたのが七夕の日だったんです。それで彦星って名付けられました」

「なるほどね」

男性は彦星に目をやった。

今度は女性が話しかけてきた。

「織姫はいないんですか？」

「以前は京子というメスがいたんですが、三年前に死んでしまって」
「そうなんですか」

女性は悲しそうに彦星を見た。

「天の川の向こうに行っちゃったんだね」

今の現実が、死という結果を更に深い悲しみの色に染めていた。
「寂しくない？」

女性は彦星に語りかけた。

彦星は聞いていないのか、起き上がるとプールに飛び込んだ。

カップルは泳いでいる彦星を眺めていた。

幸太郎は少しでも楽しく見て欲しいと思って、彦星の話をした。

「こいつ、京子に頭が上がりなかつたらしくて、しょっちゅうエサを取られてはイジけてたらしいです」

「へえ。白熊でも尻に敷かれるんですね」

男性は女性の方を見て笑った。

「何よ」

女性は少し怒った振りをしたが、彦星を見ながら微笑んだ。

「彦星は僕の弟みたいなものです。なつ、彦星」

幸太郎が彦星の名を叫ぶと、水面から顔を出して幸太郎を見た。しかし、プイツと横を向き、再び泳ぎだした。

「俺の方がお兄ちゃんだ、って言ってるみたい」

女性を楽しそうに笑った。

幸太郎は頭を掻いた。

カップルを見送り、彦星に話しかけた。

「お前、僕を弟だと思ってるのか？」

彦星はお気に入りの場所に寝転ぶと、大きくあくびをした。

幸太郎は微笑みながら、彦星の姿を眺めていた。

前日は告知の成果もあったのか、百人近い客が来園した。

幸太郎は前日から当直として泊り込んでいて、寝癖の付いた後ろ髪を押さえていた。

「おはよう。変わった事はなかったかい？」

園長が一番でやってきて、近所のコンビニで買ったであろうおにぎりを手渡してくれた。

「はい。いつもと変わらずって感じです」

園長は二人分のお茶をいれ、一つを幸太郎の前に差し出した。

幸太郎はおにぎりを口にくわえ、お茶を受け取った。

園長は自分の席に座り、窓から外の様子を眺めた。

「動物達は何も知らないからね」

顔は見えなかったが、声からは園長の顔が切なさで曇っている事を察する事ができた。

続々とスタッフが集まってきて、いつものように開園の準備を進めた。

幸太郎はいつものように彦星と来客を待っていた。

すると、開園放送の前にスピーカーから園長の声が響いてきた。

「皆さん、本日はお客様がいっぱいじゃないかもしれません。ですから、職員の皆さんが、しっかりと動物達を見てあげて下さい」

園長の声は少し震えていた。

「ここにいる動物達は、遠い故郷を離れ、多くの人達に命の素晴らしさを伝える為にやってきてくれました。だから、最後まで精一杯生きる彼らを、あなた方のまぶたにしっかりと焼き付けて下さい」

しばらくして最初に訪れたのは園長だった。

「彦星、元気にしてるか？」

園長は彦星に手を振った。

彦星は寝返りで答えた。

「ははは。相変わらず男には興味がなさそうだな」

園長はしばらく彦星を眺めていた。

「君も今日はここにいるんじゃないかと、他の動物達も見てあげてくれ」
そう言くと、次の動物を見るべく去って行った。

その後、職員達が次々とやってきた。

彦星も調子が上がってきたようで、元気良くプールで泳ぐ姿を披露していた。

幸太郎も見て回ろうとした時、見た事のある人影に目が止まった。

溝口の妻は愛娘の手を引いていた。

「こんにちは」

夫人は軽くお辞儀をした。

溝口家は寮の近所だったので、幸太郎はよくお邪魔しては食事をこ馳走になっていた。

「ほら、白熊さんよ」

愛娘は母に抱え上げてもらい、泳ぐ彦星を見てはしゃいだ。

幸太郎が何も言わずに横にいと、夫人から話始めた。

「今朝も喧嘩したんです」

幸太郎は夫人を見た。

「あの人、こんな時でも仕事に行くって。だから私、「家族よりも動物が大切なの」って言っちゃったんです」

幸太郎は何と答えて良いのかわからず、彦星に顔を戻した。

夫人も彦星を眺めながら、話を続けた。

「そうしたら、あの何て言ったと思います？」「あいつらだって、俺の家族だ」ですって」

夫人はクスツと笑うと、抱えていた愛娘を降ろして言った。

「私は熊を生んだ覚えはないんですけどね」

降ろされた娘は、もつと彦星を見ようと背伸びをして手すりにしがみついていた。

「ほら、パパの熊さんを見に行くわよ」

夫人は娘の手を取った。

「良かったら、案内しますよ」

幸太郎は二人を熊舎へと連れて行った。

その姿を見た溝口は、大きく両手を振った。

「パパだ！」

娘は母の手を振り切り、父の元へ走っていった。

「来てくれたのか」

溝口は愛娘を抱き上げた。

「私達の家族なんでしょ？会いに来ない訳ないじゃない」

妻の言葉に夫は照れたように笑った。

「ほら、コイツがお兄ちゃんのゴン太だ」

「おっきいね」

「溝口ゴン太って、おかしな名前ね」

家族に会えて、ゴン太も嬉しそうに檻の前を行ったり来たりしていた。

幸太郎はそのまま園内を見て回った。

普段は他の動物達を見て回る事などなく、自分の職場なのに初めて来たような感覚だった。

象舎に差し掛かった時、園長の姿が見えた。

園長は、一頭の象を眺めていた。

「ミミは元気そうですね」

幸太郎が声を掛けると、園長は慌てて目を擦った。

幸太郎は気付かない振りをしてミミを眺めた。

「私には夢があつてね」

園長もミミを眺めながら語り始めた。

「定年したら、どこかに土地を買って、私の動物園を作るんだ」

「園長の、ですか？」

「ああ。小さくても良いんだ。ヤギやロバ、ウサギやネズミを飼って、自由に見てもらおうのさ」

「ふれあい広場みたいなものですか？」

「ちよつと違うな。園内の広場は、子供達に動物に触れ合ってもらふ場所だろう？」

「そうですね」

「あれはあれで素晴らしいと思うよ。子供達に命に触れ合ってもらふ大切な場所だ」

「ええ」

「でもね。私が作りたいのは、動物達と共に生きる動物園なんだ」

「共に生きる？」

「ああ。動物に餌を与え、寝床の掃除をして、動物に語りかける。

一時のアトラクションとしてではなくてね」

「飼育員になつてもらうって事ですか？」

園長は答えなかった。

「犬や猫、人間のペットとして飼われている動物達は、それはそれで幸せかもしれない。でもね」

園長は幸太郎に顔を向けた。

「私達人間は、動物達にちゃんと尊敬の念を抱いていなければならぬんじゃないだろうか？」

幸太郎は答えに窮した。

しかし、園長は幸太郎に問いかけたというより、自分自身に問いかけているようだった。

「私達が動物を見守っているのではない。ただ共に地球という場所

に生かされているだけなんじゃないのかと思うんだよ」

再びミミに目を向けた。

「確かにこの子達は私達の手がなければ生きてはいけない。でも、そうしたのは人間だ。ペット達だって、人間の飼われる前は野生の動物だったんだ」

ミミを見る園長の目が潤んでいた。

「それなのに、この子達はどうかい？こんなに誇りに満ち、命を燃やしている。輝いているじゃないか」

園長の頬を一筋の涙が流れた。

「人間が動物の世話をしているなんて、ただの驕りだ。^{おこ}私達は同じ星に生きる生命として、助け合っているに過ぎないんだから」

園長は服の袖で涙を拭くと、幸太郎と向かい合った。

「君だって、責任感だけでここにいる訳じゃないだろう？」

幸太郎は頷いた。

「ここにいる皆は、動物の美しさに惹かれ、ただ愛し、共に生きる事の素晴らしさを知っている者ばかりだよ」

「はい」

「その事を多くの人に感じてもらう。それが私の夢なんだよ」

幸太郎は園長とミミの会話を邪魔しないように、そつとその場から離れた。

生肉を投げ入れると、彦星は前足で生肉を押さえながらかぶりついた。

飼育員達は自分の担当の動物達と過ごしているのだろう。

辺りには幸太郎の他に誰もいなかった。

幸太郎は手すりから身を乗り出すように寄り掛かると、美味しそうに肉を食べる彦星に語りかけた。

「園長の夢の話を聞いたんだ」

彦星は肉に夢中で、幸太郎の話など聞こうともしない。

しかし、幸太郎は気にせず続けた。

「僕は小学生の時から動物園で働くのが夢だった。動物が好きだったからね。でも一番の理由は…」

幸太郎は人気のない園内を見回した。

「動物園が好きなんだ」

短い夏を精一杯生きようと力の限りに鳴くアブラゼミが、人気のない動物園を更に寂しく感じさせる。

「ここには遊園地みたいに興奮するアトラクションもなければ、夢中にさせてくれる遊具もない。でも、みんな楽しそうに動物を見ている」

幸太郎が彦星を見ると、既に食べ終わってお気に入りの場所に寝転んでいた。

「僕には園長みたいに難しい事はわからない。でも、子供達がお前を見て喜んでくれる姿を眺めるのが好きなんだ」

幸太郎は彦星を見つめた。

彦星は眠そうな顔で幸太郎を見ていた。

そんな彦星の顔を見て、思わず笑みがこぼれた。

「動物園は、みんなに笑顔になってもらう為にあるって信じてる。

だから僕は、最後までここでお客様を迎えるって決めたんだ。みんなに笑顔になってもらう。それが僕の夢だから」

彦星は大きなあくびをした。

「本当は怖くて逃げ出したい。でも、お前と一緒にだから、こうして落ち着いていられるんだろうな」

耳をピクピクさせていたが、眠気に負けて目を閉じた。

そんな姿を見ると、幸太郎まで眠りに落ちそうだった。

「もし僕達が死んで、いつか生まれ変わる日が来たら、また僕の弟になってくれるかい？」

彦星は体を揺らすと、ゴロンと寝返りを打った。

「わかったよ。僕が弟で良い」

幸太郎は苦笑いしてそう言った。

彦星は大きな背中を上下させて、深い呼吸を繰り返していた。

「いつかお前の故郷に行つて、一緒にオーロラを見れたら良いな」
手すりから起き上がると、入場ゲートに向き直した。

視線の先には人影がなかった。

それでも姿勢を正して、帽子を被り直した。

真夏の暑さが、陽炎のように辺りを滲ませていた。

幸太郎が目を閉じると、一面真っ白な雪に覆われた世界が浮かんできた。

吹き付ける冷たい雪と風は、やがて収まり静寂が辺りを包んだ。

空を見上げると、淡く輝く光のカーテンが広がっていた。

「兄ちゃん、オーロラだよ」

「オーロラ？それ、美味しいのか？」

空に浮かぶ大自然の芸術を、二頭の白熊は不思議そうに見上げていた。

Third episode (前書き)

最後の時間の最終話です。

Third episode

「ケイト、知ってるか？」

ハッシュポテトを口に入れようとした瞬間、隣の席に座っていた男が声を掛けてきた。

「知ってるって何を？」

啓人は持っていたフォークを皿に戻すと、男を見て尋ね返した。

「噂だよ。巨大な隕石群が地球に向かって来てるって噂」

男は薄笑いを浮かべると、フォークでチキンソテーを一刺しして口に運んだ。

「隕石群？知らないな」

啓人は思い出したようにフォークを口に運んだ。

「グリーンベルトに知り合いがいてね。その話を聞いたんだ」

グリーンベルトにはゴダード宇宙飛行センターがあり、衛星の管制を行っている。

「まだ未確認らしいんだが、地球に直撃する可能性もあるらしいぜ」
啓人はコップの水を飲み干した。

「お前の話は当てにならないからな。有名だぜ。」「ジョナの話は信じるな」ってな」

そう言って立ち上がると、トレイを持って席を離れた。

「何だよ。ったく」

男はつまらなそうにサラダを突付いた。

藤堂啓人はNASAの宇宙飛行局に属し、宇宙飛行士としての訓練の傍ら、無人調査船のコントロールを学んでいた。

冷戦に幕が降りたのと同時に宇宙開発への必要性が軽視されるようになり、大規模な有人飛行計画も過去のものとなった。

それに伴い、カッシーニやユリシースのように、無人探査機での惑星調査にシフトされていた。

啓人は無人船に搭載した探査機を、地球上からコントロールする為の訓練を受けていた。

「人類が宇宙を泳ぐ時代は終わったな」

同僚のルイスの口癖だ。

「宇宙ステーションに行けば泳げるさ」

ケイトはモニターに映る岩だらけの景色に集中して、レバーを慎重に倒した。

隣の部屋では月の映像を元に再現した荒野を、銀色に輝く六本の足を持った無人探査機が、ゆっくりと目標地点を目指して進んでいた。

「完成した頃には俺達はお払い箱さ」

ルイスは別のモニターで隣室の様子を覗^{うかが}いながら、ガムを口に放り込んだ。

訓練が終わり、トレーニングルームに移動してランニングマシンに乗った。

「おもちゃの操縦はどうだい？」

隣で走っていたトニーが声を掛けてきた。

「クリスマスには新しいのを買って欲しい所だね」

啓人は笑いながら答えると、動き出したベルトに合わせて走り出した。

「ママは金欠だからなあ。金は宇宙科学局が全部持って行っちゃう」

「トニーはおねだりしたのかい？」

「同じプログラムを三ヶ月も繰り返し訓練させられてるんだぜ？目をつぶってもできちゃうよ」

トニーはスピードを上げて、最後のスパートをかけた。

そこにルイスがやってきた。

「シャトルの操縦なんて、訓練するだけ無駄なんじゃないか」

そう言っただけで大笑いした。

トニーはランニングマシンから降りると、レストランのウェイターのように右手を広げ、ルイスに譲った。

「これはこれは、偉大なる宇宙飛行士様、ランニングマシンをご利用

用ですか？」

「うるせえ」

ルイスは憮然とした表情でランニングマシンに乗った。

三人の中で、最初に宇宙飛行のチャンスを得たのはルイスだった。

しかし、飛び立つ二週間前に体調を崩し、結局宇宙に行く事はかなわなかった経験がある。

トニーは首に掛けたタオルで汗を拭きながら言った。

「船外作業の訓練の方がよっぽど無駄に見えるがね」

その言葉にルイスが反応し、ギロリとトニーを睨み付けた。

「二人とも、それぐらいにしておけよ」

啓人はランニングマシンを降りた。

ウェイトリフトの重さを調整していると、トニーが側にやってきた。

「ジョナの話、聞いたか？」

啓人は食堂での事を思い出した。

「ホラ話の事か？」

するとトニーは声をひそめるようにして呟いた。

「上の連中に引っ張られたらしいぞ」

啓人は驚いてトニーを見た。

「恐らくは事情聴取の為だろうが、ケイトも話を聞いているだろうから、一応教えておいた方が良いと思ってな」

トニーはそれだけ言うと、シャワールームに消えていった。

翌日、啓人は上官に呼び出され、別室に連れて行かれた。

そこには知らない男が三人座っていた。

「ケイト・トウドウだな？座りたまえ」

中央の男が着席を促した。

「君はジョナサン・グースと同じチームだったな？」

「はい」

「彼から何か聞いていると思うが？」

啓人は隕石群の話を聞いた事を答えた。

「これから話す事は、一切外部に漏らさぬように」

中央の男はテーブルの上で手を組み、厳しい目つきで啓人を見た。

「現在、我々は特別な任務を受けている」

右に座った男が話し始めた。

「コードネームはヤハウエ作戦。地球の存亡をかけた作戦だ」

男はヤハウエ作戦の概要を語った。

ジヨナの言う通り、隕石群が地球に向かってきていて、四週間後に最接近するという事だった。

そして、衝突の確立が高い事。

その場合、南米大陸が消えてなくなり、太平洋の海水が全て蒸発する。

翌日には地球全体を衝撃波が襲い、そして地球は死の大地と化す事。それらを未然に防ぐ為の隕石破壊作戦がヤハウエ作戦だった。

「この事は、アメリカだけではなく、全世界の問題だ。無論各国も既に知っている」

啓人は冷静になって考えた。

「そのような機密を何故私に？」

ジヨナの話の口封じであれば、そこまで詳細を話す必要はないはずだ。

中央の男が再び口を開いた。

「君が聞いてしまったのは確かに予想外の事だ。しかし、今となつては好都合……と言うべき事かな」

厳しい目を啓人に向けたまま続けた。

「君にはヤハウエ作戦に参加してもらう。明朝、速やかにヒューストンに向かうように」

啓人は驚きの表情を隠せなかった。

「ヒューストン……ですか？」

「ジヨンソン宇宙センターで作戦の詳細を説明する。明朝八時に迎えを出す。それまでに出発の準備を行うように」

右の男が事務的な口調で告げた。

啓人が呆然としていると、中央の男が厳しい声で告げた。

「この事は国家機密である。君に拒否する権限はない。また、外部の者に漏らした場合、相応の措置が下る事を忘れるな」
そして、冷やかな笑みを浮かべた。

「君にも妻や子供がいるのだろう？健闘を祈る。以上だ」

脇に立っていた兵士に促されるまま部屋を後にした。

長い廊下で一人立ち尽くし、事態を飲み込もうと懸命に考えたが、浮かんでくるのは男の冷やかな笑みだけだった。

「パパ、おかえり」

リビングでテレビゲームをしていたミックは、啓人の姿を見て走り寄った。

「あら、どうしたの？」

ソファで雑誌を読んでいた妻のミカエラは、夫の姿に驚いた。

「帰りは来週だったでしょ？」

「ちよつと、急な出張が入ってね」

啓人はソファに腰を下ろすとネクタイを緩めた。

ミックは父と遊ぼうとまとわりついたが、啓人は急な出来事で頭が一杯になっていて、息子の願いを察してやる余裕がなかった。

「パパは疲れてるんだから、キャッチボールはまた今度ね」

ミカエラがそう言つと、ミックはつまらなそうにゲームの続きを始めた。

「何かあったの？」

思わず隕石の事を言いそうになったが、何とか踏み止まった。

「明日八時に迎えが来る。今度はしばらく帰って来れないかもしれないんだ」

夫の態度をいぶかしがったが、それ以上は何も聞かなかった。

翌日、八時ジャストに迎えの車が来て、空港まで連れて行かれた。

「大変な事になりそうだな」

空港で合流した四人は、これからの事を想像して一様に暗い表情だ

った。

「大体お前が余計な話をするからこうなったんだぞ」

トニーはジヨナに冷たい目線を送った。

「お前らは仕方がないさ。俺なんてジヨナの話も聞いてないのに、同じチームだからって巻き込まれたんだぞ」

ルイスは口を尖らせて言った。

ジヨナは申し訳なさそうに苦笑いした。

「笑ってごまかせる問題じゃないからな」

言い捨てるようにトニーは入場ゲートに向かった。

ジョンソン宇宙センターはシャトルの研究や管制を行う場所で、歴代の宇宙飛行士達を見守り続けた所だ。

「今回の作戦の指揮を行う、バリー・ハロルドだ。よろしく」

屈強そうな大きな体の男はそう名乗り、握手を求めてきた。

「本来なら皆を宇宙に送るためには長い準備期間が必要だが、緊急事態の為に皆には三週間後に宇宙へ上がってもらう」

残された期間が四週間しかない事は知っていたが、改めてそう言われると事の重大さが増してきた。

「三週間で宇宙：か」

「宇宙にたどり着く前に天国って事はないか？」

トニーとジヨナは呟いた。

「我々も最善を尽くす。皆もそのつもりで頼むぞ」

それから終日ミーティングが行われた。

宇宙へ上がるのは三名。

シャトルの操縦をトニー。

ルイスは破壊用の核ミサイルを船外で準備する役割だった。

そして啓人が発射された核ミサイルを目的ポイントヘリモートコントロールする。

ジヨナはバックアップ要員に決まった。

「何で原因を作った奴がバックアップなんだよ」

食堂で夕食を採っていた時にルイスがこぼした。

ジヨナは気まずそうにフォークを口に運んでいた。

「そう言っなよ。隕石はジヨナのせいじゃないんだから」

啓人がそう言うと、ルイスはそれ以上何も言わなかった。

啓人は翌日からミサイルコントロールの訓練に入った。

今回は宇宙空間での発射の為、高出力の噴射装置は必要がない。

その為、グレン研究センターで開発された小型探査船の推進装置が使われる事になっていた。

探査船の操縦は日頃の訓練で行っていたので、操縦に関してはそれほど違和感がなかった。

「今回のミサイルには震管が五箇所ついていますが、あくまで先頭部分から隕石に着弾させられるようにして下さい」

ミサイルの担当者からはそう言われていたので、目的ポイントに垂直に当てられるように繰り返し訓練が行われた。

リモートで爆発させる事は可能だが、隕石のスピードと核の破壊力から、タイミングを計る事も間近で観察する事もできない為、震管を使うしか方法がなかった。

そして時間は流れ、あつという間に打ち上げの日がやってきた。

「結局家族には会えないのか」

ルイスは待機室の窓から外を見ていた。

「まだ世間には公表されていないからな」

トニーはガムを口に放り込んだ。

啓人も窓から外を眺めた。

視線の先には打ち上げ台に立てかけるようにシャトルが鎮座していた。

夢だった宇宙飛行が、こんな形で現実になるとは夢にも思っていなかった。

この三週間は宇宙に上がるという実感が全くなかったが、こうして間近でシャトルを見ると、体の中でふつふつと湧き上がる熱い思いを感じた。

（ミカエラ、ミック、大丈夫だからな）

啓人は家族の写真を見た。

そこには家族三人の笑顔があった。

「搭乗を開始します」

スピーカーから打ち上げの開始が合図された。

「そんじゃ、一発かましに行きますか」

トニーは気合を入れるように手を叩いた。

「帰ってきたらヒーローか」

ルイスは宇宙用ヘルメットを小脇に抱え、搭乗口へと向かった。

啓人はもう一度外を見た。

ケネディ宇宙センターの広大な敷地には、鮮やかな緑が広がっていた。

「地球の為に……か」

ドアを開けると、輝く日差しが全身を包んだ。

打ち上げの衝撃は想像していたものよりも強烈だった。

肉も骨も血も、全てが後方へと引っ張られた。

やがて静寂が訪れて、自由になった顔は自然と小さな窓に向けられた。

「宇宙だ！」

固定ベルトを外してヘルメットを外すと、側面の小さな窓に近付いた。

果てしない闇の世界が繰り広げられていた。

「打ち上げ成功おめでとう」

宇宙の闇に感動していると、スピーカーからバリーの声が聞こえてきた。

「しかし、君達のミッションはそれで終わりではない。速やかに作戦ポイントへ向かってくれ」

トニーは座標軸を確認し、シャトルを目的地に進めた。
「あった。ここだ」

目的地には先に打ち上げられていたロケットが漂っていた。

「じゃあ俺の出番だな」

ルイスは船外に出る準備を始めた。

船外に出ると、漂っていたロケットに近付き、格納部分の扉を開いた。

そしてパネルを操作すると、白く輝くミサイルが姿を現した。

「あれが人類の狂気か」

トニーはミサイルを見て呟いた。

「俺の爺さんが言ってたよ。「人類は二つの過ちを犯した」ってさ」

「何の事？」

啓人が尋ねると、トニーは肩をすくめて言った。

「神の導きにそむいて知識の果実を食べた事。もう一つはあいつを作った事だとさ」

啓人は窓越しに白く輝く物体を眺めた。

「トニーの爺さんは大戦に行ったのか」

「ああ。海軍の大尉だった。退役してから、ずっと悔やんでた。

あいつが投下された事を」

トニーは右手で十字を切ると、その手に軽くキスをした。

「爺さん。やつとあいつを人類の為に使える時がきたぜ」

啓人はトニーを見た。

トニーは笑みを浮かべた。

「これでやつと爺さんも天国で顔向けできるさ。狂気に巻き込まれて死んで行つた人達にね」

啓人は日本人として核兵器の存在に複雑な思いがある。

それが人類を救う最後の手段となっている事も。

それでも、今は阻止しなければならぬ事がある。

そして、これが最後の核兵器の発射となる事を祈った。

ルイスが作業を終えて戻ってきた。

「全部で八発。それぞれの制御コードはこれだ」

回収してきたプレートを啓人に渡した。

「核はもつとあるつてのに、打ち上げられたのがたつた八発かよ」
トニーはため息をついた。

「仕方ないだろう。実績のない国に頼んで、地上でドカンじゃ笑い話にもならんからな」

ルイスはリモートコントロール用の制御アンテナのテストを始めた。

「どうだ、ケイト」

「ああ。いけそうだ」

準備を終え、ジョンソン宇宙センターの管制室に通信を繋いだ。

「こちらロト。作戦準備完了しました」

「了解。予定通り、最初の一発は先行する小隕石群に照準」

「了解」

啓人は深呼吸してレバーを握った。

「準備は良いか？」

啓人が頷くのを確認して、ルイスは発射ボタンを押した。

啓人はモニターに写る射線上に光の点が重なるように、慎重にレバーを動かした。

「よし、射線に乗った！」

進路をロックして、制御コードを消去した。

「ロトより管制へ。第一射完了」

「管制了解。二時間後に第二射から第六射をソドムに照準」

「了解」

二時間後、隕石群の中で一番大きい隕石に向けて、ミサイルを発射した。

「第六射完了」

「了解。第七、八射をゴモラに照準。完了後発射」

二番目に大きい隕石に向けて、残りの二発を発射した。

「結果は四十六時間後か」

トニーは首を回した。

「お疲れ。食事にしよう」

ルイスは啓人の肩を叩き、笑顔を見せた。

その二日後、ジョンソン宇宙センターには怒声が響き渡っていた。

「何故なんだ！原因を調査しろ！」

「予定の四十パーセントって、何かの計算ミスじゃないのか！」
核ミサイルでの攻撃が、事実上失敗に終わっていた。

予定していた進行角度の修正に対し、結果は三十七パーセントの角度修正しか発生しなかった。

「これでは落ちる場所が変わるだけじゃないか！」

バリーは隕石の予想進路図を見て頭を抱えた。

「大統領に報告して、各国から再度ミサイルを打ち上げさせる」

バリーは部下に指示を出し、手元の分厚い冊子をめくった。

「間に合うのは五発が限界か」

計算では八発で充分に進路を変えることができたはずだった。

六時間後、調査の報告があった。

隕石群の先頭にあつた小隕石群の排除を行う為の第一射が、予想よりも手前で隕石に触れて爆発し、第二射以降の進路を確保できなかったのが原因と書かれていた。

「隕石群の形態は充分に観測していたのではなかったのか！」

バリーは報告書の束をテーブルに叩き付けた。

周囲に集まっていたスタッフ達は、身を硬直させていた。

「ミサイルの状況は？」

「準備が進められております。現状では十八時間後に五発の核ミサイルが打ち上げ完了予定です」

「ミサイルの進路は？」

「ソドムの角度修正を優先する必要があります。よって、四発をソドム、一発をゴモラに」

「ゴモラは一発で大丈夫なのか？」

「ゴモラの修正は七十八パーセント完了しておりますので」

「ギリギリという事か……」

啓人達は不安を抱えたまま、管制からの連絡を待っていた。予定を大幅に過ぎているのに、帰還命令が出ないからだ。

「失敗したって事はないよな？」

「ちゃんと指示通りやったさ！」

「ケイトのミスだなんて誰も思っていないさ。トニーも止めておけ」

三人は重圧に耐えながら、地球からの通信を待った。

「管制よりロトへ」

やっと通信が来た。

「こちらロト」

「計画に変更がある。直ちにポイントを移動してくれ」

詳細を聞き、三人は愕然とした。

指示されたポイントには既にロケットが漂っていた。

前回と同じようにルイスが作業し、啓人がコントロールした。

「これで上手く行ってくれよ」

全てのミサイルを発射して、ルイスは神に祈った。

「もし、これでもダメだったら……」

啓人は窓から地球を見た。

無数の命が息づく青く輝く星が、火星のような灼熱と寒波の大地に変わる事を想像していた。

「やるだけの事はやったさ」

トニーはフワフワと浮かぶガムを口に入れ、後は神の思し召しとばかりに十字を切った。

三人が仮眠を取っていると、通信機が鳴った。

「管制よりロトへ。作戦は終了した」

トニーは拳を握り締め、ガッツポーズをした。

「ロトはこれより帰還準備に入ります」

「その必要はありません。ロトは建設中の宇宙ステーションにドッキングし、別命があるまで待機して下さい」

三人は顔を見合わせた。

「それは…どういう事ですか？」

トニーの問いに、管制官は同じ言葉を繰り返した。

「ロトは宇宙ステーションに合流し、そのまま待機して下さい」
一方的に通信が切れた。

「どうなってるんだよ！」

トニーはルイスを見た。

ルイスは俯きながらため息を落とすと、呟くように答えた。

「作戦は失敗したって事だろうな」

「そんなバカな！」

啓人はルイスに詰め寄った。

「ケイト、落ち着け」

ルイスは啓人を押さえつけるようになだめた。

「とにかく、情報を集めるしかない」

ルイスは通信機で管制室を呼び出した。

「ハロルド局長と話がしたい」

しばらくして、バリーが通信に出た。

「作戦は失敗したのですか？」

「ソドムは地球の周回上から外れた。しかし、ゴモラは以前地球に向けて進路を取っている」

「直撃の可能性は？」

「五十パーセントという所だ」

ルイスは唇を噛んだ。

「君達は一刻も早く宇宙ステーションにドッキングしてくれ。そのままでは隕石の餌食になるぞ」

そのまま通信が切れた。

しばらくは誰も言葉が出なかった。

沈黙を破ったのは啓人だった。

「宇宙ステーションに合流して何ができるって言うんだ？」

ルイスは啓人を見ずに呟いた。

「俺達に地球の行く末を見届けろって事だろうさ」

「見届けた所でどうなる！家族が死んで、俺達も地球には帰れずに宇宙で死ねって事か？」

トニーは船壁を叩いた。

その勢いでトニーの体は船内を漂った。

「やめる！我々の命を繋ぐ船だぞ」

「命を繋ぐ？今死んだって同じ事だろ！」

「まだ落ちると決まった訳じゃない」

ルイスは目頭を押さえた。

緊張の連続で、三人共疲労がピークに来ていた。

「でも、半分の確立で地球は終わる」

啓人がぼつりと呟いた。

「お偉いさんの事だ。本当はもっと高い確率で落ちるんだろうさ」

トニーは苦々しい口調で言った。

啓人は窓から外を見た。

核ミサイルを運んだロケットが黒の世界に漂っていた。

その先では、美しい星が鼓動を続けている。

「ちょっと聞いてくれないか？」

啓人は意を決して口を開いた。

「局長。ロトより通信が入っております」

バリーは大統領補佐官と電話で話していた。

右手を差し出して待てのジェスチャーを取り、話を切り上げようとした。

「ですので、今からミサイルを打ち上げた所で間に合いません。大統領にもそうお伝え下さい」

「えい、くそ！」

受話器を叩きつけ、通信用のヘッドフォンを耳に当てた。

「ハロルドだ」

「こちらロト。一つ提案があります」

ルイスは落ち着いた口調で話し始めた。

「我々に、最後のチャンスを下さい」

「最後のチャンス？」

「はい。シャトルにはまだ燃料が残っています。核ほどの破壊力はないにしても、ゴモラに衝撃を与える事は可能と判断致します」

「シャトルごと突っ込むという事か？」

「それ以外にも、ミサイルの打ち上げに使われたロケットがあります。それらをワイヤーでシャトルにくくりつければ、更に爆発力が増します」

「何を言っている。君達はどうやって脱出すると言うのだ」

「脱出はできません。乗船したまま突入します」

バリーは言葉を失った。

確かにやれる事と言ったらそれぐらいしかない。しかし、バリーには許可する事ができなかった。

「それは認められない」

「何故ですか？それしか方法はありません」

「君達が乗っているシャトルにどれだけの予算がつぎ込まれているのか知っているのか？」

「この期に及んで金の話をしている場合ではありません！」

ルイスは声を荒げた。

「我々しか地球を救う事はできないんです！」

バリーは無言のまま、モニターに目をやった。

着実に隕石は地球に向かってきていた。

「しかし、大統領に承認頂かなければ……」

「局長！我々は大統領の為に任務を遂行している訳ではありません！」

ルイスの興奮した声は管制室中に響き渡った。

「我々は残された家族の為、人類の為にここにいるのです！」

管制室の誰もが愛する者を思った。

バリーは震えるほど力を込めて拳を握っていた。

「無駄かもしれんが、それしか残された手段はないな。君達には申

し訳ないが、その命、人類の為に捧げてくれ」

大きく息を吐き、モニターに写るルイスを見つめた。

「管制よりロトへ。だだちに作業にかかってくれ」

「ロト了解」

通信が切れても、バリーは真つ黒なモニターを見続けた。

「大統領に連絡を取ってくれ。それと…」

ルイスと啓人がワイヤーでロケットをシャトルに固定している間、トニーは進路の確認を急いだ。

作業を初めて二時間後、シャトルには四台のロケットが取り巻くように固定された。

「準備は完了だ。進路はどうだ？」

「こつちもOKだ」

トニーは親指を立てて合図した。

「でも、死ぬのは俺一人で良かったんだぜ」

トニーは二人を見た。

「言い出したのは俺なんだから、一緒に行くに決まってるだろ？」

啓人は推進剤の残量をチェックしながら言った。

「お前らみたいなヒヨっ子だけじゃ心配だからな」

ルイスは白い歯を見せた。

「みんなバカだねえ」

準備を一通り終え、軽い食事を取った。

「最後ぐらいは女の手料理でも食いたかったなあ」

トニーはドライフードを食べながらおどけて見せた。

「確か婚約者がいるんだよね？」

「暮れに結婚式を挙げる予定だったんだけどな」

胸ポケットには婚約者の写真が入っていた。

「なかなかの美人じゃないか」

ルイスは写真を見てそう言った。

「ルイスは結婚してどれくらい経つんだ？」

「今年で十二年目だ」

「ケイトは？」

「うちは五年」

三人は愛する者へ思いを馳せた。

「きつと大丈夫だよな」

トニーが呟いた。

「大丈夫さ。決まっているだろう」

ルイスは食べ終わったビニール袋をダストボックスに投げ入れた。

「そろそろ行くか」

ルイスが通信機のスイッチを押した。

「ロトより管制へ。準備が完了した」

「管制了解。ケイトを出してくれ」

言われるままに啓人は応じた。

「ケイト……」

スピーカーの向こうから、ミカエラの声が聞こえた。

「ミカエラ！」

啓人はその声に驚いた。

「どうして？」

「軍の人が家に来て、あなたと最後に話ができるって」

ミカエラは軍の基地に連れてこられていた。

軍からの電波をジョンソン宇宙センターが中継していた。

「どうして、どうしてあなたが……」

泣き崩れるミカエラの声が、シャトルにも響き渡っていた。

「ごめん。こうするしかなかったんだ」

啓人は力一杯シートを握り締めた。

「奥さん。時間がありません」

軍の関係者が声を掛けると、ミカエラは溢れる涙もそのままにマイクにしがみついた。

「ケイト。ミックの事は心配しないで。私がずっと側にいるから」

「ああ。頼んだよ」

「ケイト。あなたに出会えて本当に良かった」

「俺もだ、ミカエラ」

「お願い……」

ミカエラは言葉を飲み込んだ。

「必ず帰ってきて」

そう言いたかった。

しかしそれが叶わぬ願いである事は聞いていた。

「私達があなたを愛している事を忘れないで」

「愛しているよ。ミックにもそう伝えてくれ」

「……」

「管制よりロトへ。トニーはいるかい？」

トニーの婚約者、ルイスの家族がそれぞれ別れを告げた。

「すまない。こんな事しかできなくて」

バリーの声は痛々しく聞こえた。

「ロトより管制へ。最後のプレゼント感謝します」

ルイスは流れる涙を拭って答えた。

「もうすぐ通信が切れる。君達と話せるのもこれで最後だ」

「局長。私達の家族の事、よろしく願います」

「わかっていて。安心してくれ」

「それでは作戦を開始します」

「……幸運を祈る」

三人は敬礼した。

「それじゃ、行くとするか」

ルイスがパネルのスイッチを入れていく。

「終わったら、俺達はヒーローって事だな」

トニーはガムを口に入れると、操縦席に座った。

啓人は窓からわずかに見える地球に目をやると、心の中で呟いた。

（本当に美しい星だ）

三人は座席に座り、お互いを見合って頷いた。

「よし、出発だ。目標はゴモラ」

ルイスが言っていると、啓人は笑って言い返した。

「違うさ。輝く未来、だろ？」

推進装置に青い光が灯り、シャトルはゆっくりと進みだした。

少しずつ離れていく地球は、命のきらめきで輝いていた。

沢山の思いを乗せたシャトルは、どこまでも続く闇を、ただまっすぐに進んで行った。

Third episode (後書き)

同じ環境設定で複数の話を書いてみたくて、最後の時間を書きました。あまり人物設定や背景を練りこんで書くタイプではないで、作り込みが甘いかもしれませんが、感想を聞かせて頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5789c/>

最後の時間

2010年10月14日21時48分発行